

書 評

自然と対話する都市へ—オランダの河川改修に学ぶ

武田史朗 著

出版社：昭和堂 発行年：2016年3月31日

価格：3,800円＋税 ISBN：9784812215371

「オランダの大地は、その多くが干拓によって人工的につくられた。」

著者がこう述べるまでもなく、オランダは国土の半分が海面下にあり、治水のための河川管理は極めて重要な課題である。その意味でも、オランダは「河川の国」である。また著者は、「不確かで恐ろしくもある」自然と対話しながら国土を維持管理してきたオランダ人の論理を、その独特なランドスケープ・建築デザインに見出している。

本書は、1996年から2015年にかけてオランダで構想・実施された「都市デザイン、自然環境の保全・創成、治水の融合」としての大規模河川拡幅事業「ルーム・フォー・ザ・リバー (RvdR: Ruimte voor de Rivier)」についての解説であるが、紙面の半分を、理解の前提となるオランダの都市計画、自然環境保全、ランドスケープデザインの歴史に割いている。

国土の自然条件が異なる日本の読者にも、ヨーロッパ地誌としての意義以外に、老朽化したインフラの更新や、気候変動に伴う災害リスクの上昇に直面する日本において、持続可能性の高い国土と質の高い空間を構築していく上で参考とすべき事例という意義がある。

「ルーム・フォー・ザ・リバー」政策を一言でいうならば、従前の「洪水を起こさない強い堤防づくり」から、「氾濫と共存する、より広い河川敷づくり」へのシフトである。これは、従前農地として高度利用していた堤外の高水敷を氾濫原に戻すというものでもある。従前のように、大規模な堤体（建設投資）や揚水ポンプ（電力）に依存する（力で抑え込む）のとは真逆の、気候変動適応（adaptation）を志向した地域デザイン、空間の質を高めるための計画論といえ、東日本大震災後の沿岸域における復興にとっても参考になる部分が多い。また、国と地方の強い連携や住民参加を打ち出していることもその特徴である。このような考え方が受容された背景としては、1）海面上昇などの気候変動影響、2）水害対策と表裏一体の水質保全需要、3）先進的な緑地ネットワーク政策の3つが挙げられている。

評者もドイツ留学中に、都市気候保全のためのまちづくり（一ノ瀬、1999）という考え方に会い、以降関連する研究に従事してきた。著者も述べているように、都市や地域は「プライベートな土地とパブリックな土地との混合体」であり、個々の私有財産の運用で

変えることができる建物などに比べれば、デザインの対象にはなりにくい側面もあろう。しかし、予測される大規模地震や気候変動に直面する今日の日本においても、このように大きなスケールの「デザイン」へのニーズは高まっていると思われる。

著者はオランダ滞在中における数多くの関係者へのヒアリング（とりわけ、協働体制やコミュニケーションについて）をもとに、対話を重ねること、そして、対話のための場づくりの重要性、さらには、20年という長い時間をかけてこのプログラムが実現されたことを強調している。評者も、ドイツで学んだことを日本などアジアの都市において、どのように生かしていけばよいかについて、思い悩みつづけてきたが、本書に語られている故事の数々を読むにつけ、一にも二にも地道なステイクホルダーとの対話が重要なのだと思い知らされた。日本では、中国のように（トップダウンで）理想的な環境まちづくりの事例が短期間に出現する、といった状況にはなりえないのである。

長期的な環境保全と短期的な経済利潤を両立させる「デザイン」の技法として、地理情報システムによる情報提供やワークショップを通じた合意形成といった、今日の日本でも流行しているプロセスは、「ルーム・フォー・ザ・リバー」の事例でも重要な役割を果たしていた。一方、「参加」が住民のガス抜きで終わってしまったり、学者の提供する膨大な環境データにもとづく提言が、計画策定の現実と向き合う実務家（プランナー）には身勝手な空論に見えたりするという指摘は、類似の経験をしてきた我々にもいささか耳の痛い部分ではある。

河川工学を（土木工学科の学部課程などで）一通り学んだ人であれば、抽象的なタイトルが並んではいるものの、各章各節の内容をイメージできるだろう。しかし、後段の各論では具体的すぎる事績の紹介が連続するので、内容の本質だけを効率よく理解しようと思って読むには忍耐力が必要であり、根気よく、かつ気楽に、ヨーロッパ地誌的な要素を楽しみながら読むのがよいだろう。

引用文献

一ノ瀬俊明 1999. ドイツの *Klimaanalyse* ～都市計画のための気候解析～. 天気 46: 709-715.